

第三回

みなかみ町俳句短歌大会

作品集

俳句の部

46 人 178 句

同点の場合は投稿順を優先しています。

一人の投稿者の受賞は一賞に限定しています。

入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

【第一位】 12点

瀬で崩れ漕でまた組む花筏

美 泉

【入選】 8点

閉ざされし母校の庭に桜舞う

林 和高

【第二位】 12点

源流の生れし谷間花辛夷
あ たにあひはなごぶし

遠藤 長代

【入選】 7点

あるがまま生きる人生春深し

高橋 基一郎

【第三位】 9点

閉校の校歌なつかし名残り雪

林 美佐子

【入選】 7点

古き世の水場の跡や草萌ゆる

平井 登志絵

【第四位】 9点

菜の花に止まる介護の送迎車

高橋 キセ子

【入選】 6点

香手向く市兵衛地藏花明り

阿部 伊亨

【第五位】 9点

行く春や遊び足りたる児の寢息

佐藤 美智子

【入選】 6点

千枚田春を並べて千の貌
かお

本間 正春

【入選】 5点

落味噲の苦みに恋し土手を這う

番場 正夫

【入選】 4点

信念をくずし花見の酒を酌む

諸田 弘

【入選】 5点

老二人石になる氣の日向ぼこ

鈴木 節子

【入選】 4点

統合のスクールバスや風光る

林 明男

【入選】 5点

入院の夫にも会えぬ花は葉に

内山 静子

【入選】 4点

何處^{どこ}えでも歩けた日々よ桜咲く

高橋 吟子

【入選】 4点

落^{ふき}のとう食べてほっこりにが笑い

長島 アキ子

【入選】 4点

福豆の升にひと文字父の筆

山田 高江

【入選】 4点

どの色となくいとほしやひなあられ

久野 公市郎

【入選】 3点

内祝い手持ち食いおり雛^{ひな}の主^{ぬし}

原澤 健吉

【以下投稿順に掲載】

雪の朝庭の木々達綿かぶる	あすなる	名は小粋その薔薇ミチコデラックス	美	泉
朝散歩風花舞って心舞う	あすなる	椋鳥か雪ぼりせわし餌求め	平澤	文恵
ベイシアへ足どり軽く春近し	あすなる	定休日雪かき仕事日が暮た	平澤	文恵
みなかみに住んで良かった春の山	あすなる	いつになる大口開けて歌える日	平澤	文恵
草萌る踏みだす一步老いの夢	高橋 基一郎	延長で凍りつく街暗寂し	平澤	文恵
春雷や渴きし宇宙 <small>そら</small> を駆けぬける	高橋 基一郎	白鳥の散らばる湖 <small>うみ</small> の豆あられ	長島	アキ子
春一番登校の少女髪みだれ	高橋 基一郎	欲張ってほほふくらます母狩	長島	アキ子
丸み増すぼやけし月や春待ちぬ	番場 正夫	あけ暮れに一人ぐらしに春ともし	長島	アキ子
椀 <small>たら</small> の芽の育ちもどかし首伸びる	番場 正夫	雪解けて過去は零に成りにけり	残	光
震災と戦争コロナ春遠し	番場 正夫	寮を出る卒業生に未来あり	残	光
北方の紛争地帯鳥雲に	杉木 輝夫	花冷えや友と語 <small>かたら</small> し終夜 <small>よもすがら</small>	残	光
ヘルパーに頼る日々なり春の暮	杉木 輝夫	花篝 <small>はなかがり</small> 今宵の闇を焦がしたり	残	光
木道の遙かつづくや下萌ゆる	杉木 輝夫	紅梅やくつきりと咲き見ごたえり	原澤	健吉
仰ぎ見る岳の雪形馬の背に	杉木 輝夫	部屋よりの家族団らん庭桜	原澤	健吉
飛花落花後退りして掃く街路	美 泉	夜桜や風の提燈 <small>ちようちん</small> 招きおり	原澤	健吉
ダム放流 <small>はし</small> 迸る飛沫 <small>しぶき</small> や風光る	美 泉	ふるさとを胸に満たせり若葉風	久野 公市郎	

七色にくるむふるさとしやぼん玉

久野 公市郎

強東風や幟はためく手打蕎麦

高橋 桂子

合格のお礼参りや梅香る

久野 公市郎

雪解川坂東太郎水しぶき

高橋 桂子

天主なき城跡かこむ桜かな

久野 とし子

天地返し畑を占めるやつくしんぼ

阿部 さだ子

老梅も万華の枝をひろげたり

久野 とし子

春先きや陽だまりに咲くクロツカス

阿部 さだ子

持ち越した命ありけり春薄暮

久野 とし子

摘み草をするらし立ちては座わる人

津 恵 女

野の蜂や夢に夢継ぐ羽音かな

久野 とし子

亡夫置きし砥石濡れ居り春の雨

津 恵 女

夜半の春ひそと焼きたる古手紙

林 美佐子

うれいありうれしかなしいさくらかな

津 恵 女

糸通すことに手間どる春炬燵

林 美佐子

歩も軽く新踏切りや若葉風

津 恵 女

人の世の悲しき戦火春寒し

林 美佐子

春うらら日光浴の赤子いて

関 和子

桜開く新中学にバス走る

林 和高

曇り空めぐりて広ぐ春の空

関 和子

雪解けの瀬音やさしき赤谷川

林 和高

風吹いて庭に遊ばす花の屑

関 和子

寒耐えて希望の光福寿草

林 和高

マスクして眼鏡曇らす春遠し

関 和子

足萎えて草につまづきオツトツト

鈴木 節子

ときめくも思い出せずに春の夢

阿部 伊亨

老いてなを日やけしている鼻頭

鈴木 節子

鋏杖に腰を伸ばせば遠柳

阿部 伊亨

松重ね八十六才華の日々

鈴木 節子

悲惨なるニュースに涙仏生会

阿部 伊亨

公園でコロナ気にせず花薙

高橋 桂子

手作りの弁当分けあふ花の下

長浜 利子

うららかな野仏参り春の風

高橋 桂子

各々がスマホ見ている花薙

長浜 利子

畑仕事一年生の見て下校	長浜	利子	ウクライナ春寒の景つのらしむ	諸田	弘
ランドセル重たそふなり一年生	長浜	利子	春祭り村の鎮守や旗のどか	諸田	弘
今生の不可思議ならむ亀鳴くも	角田	勝子	春場所や若隆景のねばり腰	諸田	弘
両隣そしてわが家も木々芽吹く	角田	勝子	満開の花に釘づけ翔タイム	林	明男
狂はせるごとく咲きをり桜かな	角田	勝子	血の滲む春の地球の命かな	林	明男
やわらかき畦が近道春惜しむ	角田	勝子	新人生マスクが背負うランドセル	澁谷	典子
入学の児等ういういし通学路	原澤	芳雄	日輪のふところにあり梅の園	澁谷	典子
大櫓 <small>けやき</small> 梢の先に春の星	原澤	芳雄	春来たる大谷選手真盛り	澁谷	典子
無人駅電車つれくる春の風	原澤	芳雄	後閑駅無人確かむつばめかな	澁谷	典子
春浅し奉納横綱土俵入り	原澤	芳雄	清明や万物全て生き生きと	岡田	完二
手まねきに降りて来さうな春の星	平井	登志絵	福寿草陽を浴び黄金に輝けり	岡田	完二
履き下ろす子の靴はやも春の泥	平井	登志絵	しだれ梅満開に咲き <small>しの</small> 叔父 <small>おじ</small> 偲 <small>しの</small> ぶ	岡田	完二
夜嵐に寝て囀に目覚めけり	平井	登志絵	悠仁様日の本背負い入学す	岡田	完二
睦まじく妻の爪切る日向ぼこ	武	子	雪解水岩にくだけて渦を巻く	益子	桂
春浅し大雪原の尾瀬ヶ原	武	子	一日にして満開や花疲	益子	桂
黄を放つまんさく山吹春の庭	武	子	麦青む赤城嶺のぞむ風の道	益子	桂
麓より上へ上へと山笑う	武	子	みなかみの清らかな水蝌蚪生まる	益子	桂

烏兔匆匆桜開花の予報あり	高橋	吟子	老梅の仄かに <small>ほの</small> によう垣根越し	林	久保
風車はずして燕待ちにけり	高橋	吟子	初聞 <small>き</small> きのウグイスの声立ちどまり	林	久保
田の神を目覚めさせたか桜咲く	高橋	吟子	空青く百舌 <small>もず</small> の一声秋深し <small>ひとこえ</small>	林	久保
花咲けど笑えぬテレビ無銭の戦禍	林	好一	久に見しにほん蒲公英群れて咲き	内山	静子
きりもなくふえて空色いぬふぐり	林	好一	雑草もしばしは抜かず花を見る	内山	静子
八十路杖吾が影法師草萌ゆる	林	好一	ハイウエーの時速こゆるや雪解川	林	恵美子
断捨離の進まぬ八十路春の行く	林	好一	春遅遅と県北のわが北の里	林	恵美子
はなし相手の退院待つや春炬燵	酒井	富子	高遠の桜のテレビや亡夫のこと	林	恵美子
桜咲く土手に菜花も咲きにけり	酒井	富子	プーチンとコロナ進化の春の乱	林	恵美子
子の故郷の月夜野の桜かな	酒井	富子	春浅し剪定鋏の響く園	翠	華
三峯山の社の庭の遅ざくら	酒井	富子	雨音も水車の音も草春賦 <small>ふ</small>	翠	華
頭巾脱ぐ冬の季語なりマスクとは	比呂	海	春めくや帯をゆるめて入る茶席	翠	華
打つ打たぬバクチン接種春かなし	比呂	海	差し出した手に乗り揺るるしやぼん玉	翠	華
ひと回りマスク大きく進級す	比呂	海	魔の岳も鎮もり返り山笑ふ	遠藤	長代
ブルースシンガーがマスク民の前で	比呂	海	沈丁花 <small>ちんちょうか</small> 匂ひほのかに闇迫る	遠藤	長代
『ただのかぜ』を唄う	比呂	海	囀りや少し遅く来て幼な鳥	遠藤	長代
日溜 <small>だ</small> まりに犬ぐり咲いて春を知る	林	久保	茶を淹れてくれる人あり春隣	須藤	清美

春愁や暈五ミりに躓きぬ	須藤 清美	春炬燵話し上手の二三人	山田 高江
木道に雪代溢れ尾瀬ヶ原	須藤 清美	桜咲き書類に記すフルネーム	山田 高江
春風をゆったり歩く野良の猫	須藤 清美	おはよりの安否確認夏近し	山田 高江
近ぢかとみてへだたる花見かな	高橋 キセ子	ほぐれゆく夜の匂ひや春の雨	佐藤 美智子
押し合ひてとどろき暮るる雪解川	高橋 キセ子	咲くさくら津波の如く大地呑む	星 光
何もかもよく乾く日や囁れり	高橋 キセ子	鞆や改良されて母子待つ	星 光
窓開る暁の風初音聴く	本間 正春	早咲の石楠花二輪 雨の糸	星 光
春泥 <small>しゅんでい</small> や誰れもが渡る石一ツ	本間 正春	半月が落ちてきそいな 桜空	星 光
春祭り真白き妻の割烹着	本間 正春		
春風や六文銭の旗揺れる	大川 美知子		
囁み締める露の天ぷら香りよし	大川 美知子		
亡き母と夢は一夜の初桜	大川 美知子		
八十年生きて春着の裾捲り	大川 美知子		
砲弾に逃げまどう民間の春	北 雲		
合格の話題とびかう里の春	北 雲		
さあ出番丹田 <small>たんでん</small> を紋め春耕す	北 雲		
ラッパの音宙 <small>ねそら</small> に奏でる黄水仙	北 雲		

短歌の部

56 人 217 首

同点の場合は投稿順を優先しています。

一人の投稿者の受賞は一賞に限定しています。

入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

【第一位】 14点

手のひらにそつと欠伸をしまいこみ

朝の舗道を少女がとおる

角田 勝子

【第二位】 14点

四尺の雪の底より黒々と

畑生れけり命ち宿して

石坂 作次

【第三位】 11点

百年を生きる時代の到来に

悩み尽きぬや長らふ老後

杉木 輝夫

【第四位】 8点

理不尽な大人が起す紛争に

罪無き子等の命あんずる

番場 正夫

【第五位】 8点

「また明日」その日の来るのを疑はぬ

あたりまえなる平和よ続け

奥村 清美

【入選】 8点

「良く振ってお飲みください」飲んでから

気づき体を回して混ぜる

田中 春枝

【入選】 7点

集落の小径に古き石碑ありすこしうすれた牧水の歌

大淵 照雄

【入選】 7点

さちぐさのまたの名をもつ福寿草

妻亡き庭に今年も咲きぬ

眞庭 義夫

【入選】 7点

県境の大動脈の務め終え

歴史を閉じる三国トンネル

大山 真紀枝

【入選】 7点

岳を背に農夫くわふ振る生き生きと

跳ね駒形こまがたが農事知らせる

ベネット 昭子

【入選】 6点

剪定の鋏の音の間こえくる

果樹園の空晴れて明るし

林 いくじ

【入選】 6点

道くさをしながら帰る学童の

声透りくる春の窓辺に

木村 初枝

【入選】 6点

新雪のふわり積もれる庭先に

金の尾ゆらす貂てんが振り向く

吉田 まゆみ

【入選】 6点

かけ上がる初台駅の階段に

君の背中が光って見えた

本多 寿美枝

【入選】 6点

花々も一気に開き開校の

みなかみ中の生徒迎えむ

澁谷 典子

【入選】 5点

点ともされてほつと安らぐ真夜中の

ナースステーションあるだけでよし

久野 とし子

【入選】 5点

春近し梅の一枝ひとえだ玄関に

待つ人なくても香り変らず

阿部 さだ子

【入選】 5点

人の世は出会い別れの繰り返し

親子となるも明日は嫁ぐ日

翠 華

【入選】 4点

泣きやまぬ孫を詫びれば老医師は

「赤児は泣くのが仕事」と笑ふ

石崎 正次

【入選】 4点

思ひ出は増えるばかりのアルバムを

如何に捨てよかすべてわがもの

関 和子

【以下投稿順に掲載】

汗かいて歩いて知るや草や木の

生る力と知恵の有るのを

やうやくに雪を出で来し妻の墓

供花は好みし水仙とせむ

かたくりのいまだ咲かざる春の野に

妻と歩みし去年のまぼろし

君の亡き野にも咲きつぐ花あるを

告げねばならず春の浅きに

幼き日祭りが嬉し茂左衛門

尊き経緯育ちて知りぬ

老いの身に次々迫るデジタル化

説明よむも理解苦しむ

早々と飛来の燕気になりし

名残雪ふる寒き朝かな

青鷺の狙うは何か急降下

雪しろ荒ぶ利根の川瀬に

面白く無き世を如何に面白く

生きる覚悟を座右の銘に

名胡桃を墳墓の地にと移り住み

年経て深む愛着深む

田の神は山にかえりて櫓田に

堆肥散らして冬を眠らす

大淵 照雄

眞庭 義夫

眞庭 義夫

眞庭 義夫

番場 正夫

番場 正夫

番場 正夫

杉木 輝夫

杉木 輝夫

杉木 輝夫

林 いくじ

おみくじは他人に見せない交際は

吉と出ました大空仰ぐ

山見えぬ平地の旅を嫌いゐて

赤城山見え安堵する母

藤原とみまごふほどのわが庭を

弥生の雨は雪山を打つ

スコップの分け目に入りし雨風が

雪のかたまり崩しゆく春

ややまろき梅と椿の枝挿せば

居間の華やぎ日毎増しゆく

寒暖をくり返しつつ春めきて

墓処の雪消ゆ彼岸中日

深々と降り積もる雪眺めつつ

過ぎしき友の思影求め

羽生君コケタ中継コロナかと

間違いであり歓喜一〇〇倍

やって来る下駄の足音妄想か

いつになるだろ華やかな街

烏川「カオカオ」鳴ける白鳥の

姿愛しく百余を数ふ

棚下の滝行待つ女行衣つけ

鉢巻強くなほ締め直す

林 いくじ

林 いくじ

荒木 洋子

荒木 洋子

荒木 洋子

荒木 洋子

平澤 文恵

平澤 文恵

平澤 文恵

田村 鶴江

田村 鶴江

まつすぐな視線とあひし交差点

抱かるる幼とバイバイ交はす

田村 鶴江

もうみんな大きく育ちし雉八羽

散歩帰りの坂道よぎる

田村 鶴江

路端の除雪滲み来し露のとう

泥の化粧が春立つを告ぐ

野沢 武

山間の小道に生る水溜り

覗く笑顔にさざ波さやぐ

野沢 武

泥雪と肩を並べし水泉の

永久の別れに匂り送らん

野沢 武

山裾に走りし県道雪解けて

融雪剤の粒の残れる

野沢 武

通い道万朶の桜潜り抜け

今朝も変らぬ我が心意気

残 光

仏壇の姪子にひとつ櫻餅

過ぎし想い出昨日の如く

残 光

四月馬鹿人事異動に欺瞞あり

嘘と知りつつ終夜泣く

残 光

花冷やいつもの犬が出てこない

どこでどうして散歩道かな

残 光

背を伸ばし腕をふりふりウォーキング

水仙芽吹いてエールをくれる

奥村 清美

電力の足らぬとなれば節電に

こたつに入れる湯たんぽ温し

奥村 清美

出合ふこと別るることは一対で

思ひを胸に青空見上ぐ

奥村 清美

友逝きて佇む夕辺新月に

肌へにいたく虎落笛聞く

溪 邨

難病の余命宣告伏せて逝く

父への思ひ早五十回忌

溪 邨

明けるごと生命を紡ぐ重き刻

透析治療一年を過ぐ

溪 邨

子に教へ孫も指導す教習所

四十余年無事故願ひて

溪 邨

束の間を無音の中に佇ちたれば

不安つのりて人ごみに入る

久野 とし子

春ごたつ目蕩む夫の安らかに

風に漂ふうき雲のよう

久野 とし子

花鋏打ち鳴らしつつもてなしの

花二三本活けてながむる

久野 とし子

陽あたりの雪どけ穴にフキノトウ

山あいの村に春の訪れ

朝倉 薫

冬枯れの林を飛びかう小鳥たち

ここにあるよとエサ箱たたく

朝倉 薫

コロナ禍でお内生活の楽しみは

リモート講座と曾孫の動画

朝倉 薫

コロナ禍でリモート講座を体験す

幸い願う賢治の世界

朝倉 薫

猿の出る山畑に先づ網を張り

馬鈴薯の種二十キロ植ゑむ

小林 博子

庭先に大釜据ゑて味噌炊す

春一番の大仕事なり

小林 博子

ウイルスの暗きニュースも片隅に

桜の花を夫と眺むる

小林 博子

山羊の草背負ひし弟を思ひ出づ

病重き身よ癒ゆる日はいつ

小林 博子

庭すみに芽のふくらみし雪椿

赤く燃えれば一隅照らす

石崎 正次

風舞えば子がぐずるやう乱れつつ

山吹の群れ色香ふりまく

石崎 正次

亜麻色の長き髪した少女きて

嫉妬している藤棚の藤

石崎 正次

運転は五十年過ぎ返納す

からっぽの車庫に小さき草生ゆ

高橋 操

春の日の夕暮れ待ちて庭畑の

土ほろほろと種芋を蒔く

高橋 操

遠き地の花のたよりに気力満ち

峠の桜日毎見つめる

高橋 操

雪下のほうれん草の逞しき

日差しに向い日日立ち上がる

高橋 操

春彼岸供え物手に石段を

孫はスイスイ我はハアハア

阿部 さだ子

初孫が電車で通う春からは

見上げる顔は笑顔いっぱい

阿部 さだ子

山里のほろにがい味ふきのとう

黄緑色に誘われる我

阿部 さだ子

孫連れて我家で遊びもう昔

夕陽に帰える満悦の妣

津 恵 女

明日は行く新任地へ旅立つ娘

城址の桜心に沁みる

津 恵 女

何故止めぬコロナ禍よそこに戦争と

人災なるに憤慨堪えず

津 恵 女

遠慮がちに厳寒の空に咲く枇杷は

夏ともなれば甘い実をつけ

津 恵 女

雪しろの流れ激しき利根川の

日差は柔くボート下りし

木村 初枝

山すその若葉の中をSLが

汽笛ひびかせ遠のきてゆく

木村 初枝

いち早く小花を咲かす繁萋らの

根はしかと地にへばりつきたり

関 和子

オーバーはクローゼットの邪魔物に

身につけぬまま終りたり

関 和子

迷ひ子になりし手先に息を掛け

思ひ出たぐり折鶴を折る

眞庭 ヨシ子

慣れゐるに鶴の折り方ふと迷ふ

後ろめたさもかそか湧きをり

眞庭 ヨシ子

姑の残せし山椒の播粉木は

野球のバット凌ぐ大きさ

長浜 莉子

パチンコが趣味の仏の戒名に

玉の字入れて黄泉へ送れり

長浜 莉子

傷つきし白鳥一羽残されて

冬に仲間の来るのを待てり

長浜 莉子

日本画の巨匠の書きし絵のよふな

そば降る雨に枝垂し柳

長浜 莉子

田起こせば土は黒々しつとりと

若がえりゆく鶴鴿走る

角田 勝子

戦場へ行くかの如く七キロの

リックで兎らは塾へと急ぐ

角田 勝子

若き日と違う涙が溢れくる

短歌に目覚めし「一握の砂」

角田 勝子

木曾街道無人の駅に降り立てば

ポストに淡き春の雪降る

原澤 芳雄

改修を終えしたため池水あおく

番の鴨が優雅に泳ぐ

原澤 芳雄

城址の桜の苔ふくらみて

白き谷川青空に映え

原澤 芳雄

峽棚田畦に黒々野焼き跡

生命たくまし草萌えはじむ

原澤 芳雄

真田氏の石垣出し沼田城

御殿桜に武士偲ぶ

諸田 弘

夜桜に沼田公園賑わいて

ライトアップに廻る提灯

諸田 弘

ウクライナ連日続く放映は

強襲悲惨いかに止めるか

諸田 弘

利根川の雪しる蒼きごうごうと

川幅広げ利根の上流

諸田 弘

冬晴れの小山に夫が響かせる

エンジンの音に小雀飛び去る

吉田 まゆみ

春の雨に宝石まとふ楓の木

プリマの様にきらきら揺るる

吉田 まゆみ

年重ねひねもす炬燵で微睡みぬ

父の口元常に動けり

吉田 まゆみ

初夢を見たいと思ひ九時に寝て

夜中の二時にトイレに向かう

本多 義二

鍋の中三種類が泳いでる

カレーがいいかシチューにするか

本多 義二

手の平で痛い腹を摩りたり

薬指から毒を出しつつ

本多 義二

牧水さん今日の草鞋は何日め

僕の地下タビ明日せんたく

本多 義二

新宿のイルミネーション人集り

二人の時間恋は初夢

篠原 忠

思い出はドアを開ければ若い日々

ファイルを重ね未来へ続く

篠原 忠

スーパーのバックで入れる白い枠

曲がると野次でため息二つ

篠原 忠

自動車では北は雪解け霧巻いて

春覗かせる南にサクラ

篠原 忠

三日前水も飲めずにいた老犬

今日はいそいそ散歩に出かけ

本多 寿美枝

青空にパステルカラーの観覧車

孫と二人木陰で手を振る

本多 寿美枝

大粒の涙のように降る雨を

無情なワイパーかき消してゆく

本多 寿美枝

メロンかなマンゴーかなとパイヤを

旅館で食べた初めての味

小林 はつ江

五時に終わり外は明るく春近い

日毎に伸びる日照時間

小林 はつ江

キーシユルシユルギギギシユー歯の治療

けずる前から鳥肌が立つ

小林 はつ江

通院を支えてくれる妹達

きつと元気になって守るから

小林 はつ江

初めての今を毎日生きている

令和四年も全力で行く

田中 春枝

ばっさりとシヨートへアーにした君を

見つめたままで上着を脱いだ

田中 春枝

雪道を走行中のギアチェンジ

バックに入れるとエンジン止まる

田中 春枝

初雪を離れた母に知らせたい

カメラに収めライン送信

大山 真紀枝

観ていると自然と変わるテレビ画面

ちらついてくる熟年離婚

大山 真紀枝

本当に消えて下さいこの世から

どうしてあるのグリーンピース

大山 真紀枝

初日の出見たいと思いい人だけ

九時に寝たのに起きたらお昼

宮崎 りえ子

雪の下もういいかいとふきのとう

春を食べよう天ぷらにして

宮崎 りえ子

エビマグロウニとイクラにアイラブユー

だけどアナゴはどうしてもムリ

宮崎 りえ子

見上げたら雲一つない澄んだ空

今日の私の気持ちと同じ

宮崎 りえ子

白地図に彩色重ねていけるはず

初心にかえる一月はじまる

篠原 香代

オセロのようなコロナ禍の寒満月

約束ばかりがまた欠けてゆく

篠原 香代

この草は更年期にも効くらしい

でも受けつけぬカメムシの草

篠原 香代

薄緑芽吹きにふんわりと

桜色添い加速する春

篠原 香代

枕元のプレゼントはサンタから

喜ぶ顔に初めての嘘

大山 智也

どうしてもだんだん細く欠けていく

水面に映る眠そうな月

大山 智也

トマトなど野菜を絞った液体も

それはジュースと言うのですね

大山 智也

雪が溶け陽が長くなり

動き出す蟻が三匹手の上を這う

大山 智也

初デビューオミクロンカブ知らぬ間に

広まっていく感染の風

倉田 富夫

コンサート楽しくさせる演奏が

顔の変化で胸がドキドキ

倉田 富夫

喋らないじーとしている考える

聞くようにするやれるかどうか

倉田 富夫

ちらちらと舞い落ちる雪庭先に

広がり積もりキャンバスになり

倉田 富夫

信念の確認をして初出勤

だって今年は壬の寅

加藤 南風

血圧が少し高めで早五年

分かっていきます運動不足

加藤 南風

山菜を見つけて手を出す直前に

によりりと進む足元の蛇

加藤 南風

冬の日の夜空へ花火音響き

離れ棲む子の笑顔懐かし

加藤 南風

初春や間に合わなかった年賀状

来年少と書く寒中見舞

金子 美由紀

雪が降りはいしゃいでいたのはいつの日か

握るスコップため息落ちる

金子 美由紀

ピツタリな答えなんてつまらんと

口を窄める因数分解

金子 美由紀

雪原に映る花火にはしゃぐ子の

マスク越しに歓声響く

金子 美由紀

新雪のキラキラ光る大地にも

大木の影伸び切るすみ絵

深代 里子

サンサンとまぶしい程に身にしみる

今朝のであいにことばなくして

深代 里子

雪どけの黄花おめみえりと立つ

共に伸びよういっぱい食べて

深代 里子

初句に「初日の出」をもってくるべきか

否否二句目あたりが良いか

山崎 杜人

満ちてゆき満ちれば欠けてゆく

月のさみしきは人で埋めちゃいけない

山崎 杜人

リスニング対策としてナンシーの

明日の予定を繰り返し聞く

山崎 杜人

あなたから貰ったものをひとつずつ

夜空へ還す星座のように

山崎 杜人

統合しみなかみ中の開校や

歴史を刻む生徒の一步

澁谷 典子

一本のソーセージ分け三人の

弁当こさえし昭和懐し

澁谷 典子

幼友とボケ防止にと文かわす

恋文を待つ乙女心や

澁谷 典子

満開の桜迎える無人駅

花びらひらりおもてなしあり

ベネット 昭子

誰にでも多少なりとも悪持つが

過中の長は悪、満ち満ちて

ベネット 昭子

清やかに人生終えんと願いたり

老いつつ惑う日日の営み

手塚 光子

戦時には大和撫子と越えたるに

卒寿迎えし嫗となれり

手塚 光子

予生とは幾つを堺に言うのかと

卒寿迎えし思案のひとつ

手塚 光子

めぐり逢え幸でしたの漆書きに

九十を忘れ心ときめく

手塚 光子

雪深きみなかみの地に籠りいて

心身共に凍しさまなり

手塚 光子

近年になき大雪に老いの身が

久しく持たぬスコップを振る

手塚 光子

連綿と降りにし雪も地にしみて

陽炎もえ立つ季節となりぬ

手塚 光子

懸命に生きしなれども悔多き

卒寿迎えし思ふことあり

手塚 光子

病院の廊下の「すみ」の椅子に寝る

初冬の夜のさむさ身にしむ

松井 とし子

送り火の静かにもえし夕焼けの

雲の流れに秋を覚えむ

松井 とし子

日々に筆持つ事の楽しけれ

乱れし筆にとゝのえる筆

松井 とし子

ひとの子を預かり教え育める

教職にある娘の帰宅は遅き

見城 邦夫

幼少の日の出逢いより八十年

つつがなく在る友と食す花季

見城 邦夫

出逢えるは八十年前の春四月

老いどち五人語りやまざり

見城 邦夫

三十一文字のうれしみ楽しみ限りなき

八十路半ばを彩りゆかな

見城 邦夫

春の空見上げて今日もほつとする

木の芽ようやく芽ぶきそめて

高橋 吟子

田の神を目覚めさせたか桜咲き

ぼちぼち田畑に人影の見ゆ

高橋 吟子

奥利根の豪雪地帯藤原も

雪囲もうはずせただろうか

高橋 吟子

廃校の記念誌に見る級友の

この世に余る我と君等と

林 好一

新聞の花便り見るひと時は

若き日にて花見せしかと

林 好一

雨毎に庭の花壇の蒼き増す

今朝は真っ白き花が一輪

林 好一

脳トレの問題を出すロボ人形

婆ななばの声に答え違ちがいか

林 好一

赤紙あかじの昔むかしに倣ならう接種券しやくしんけん

晶子あきこの歌が頭かぶを過する

比 呂 海

後遺症こういしやう有ると知り得たワクチンよ

破棄はき・差し戻し出来ると言ふに

比 呂 海

有るといふ大前提だいぜんていで煽ほらるる

顔かほの襦袢むつぎを外せぬ民草

比 呂 海

己おれが身みに入れる物ものなら調しらべし

春の野のに出て薬草やくそうを摘とむ

比 呂 海

マリウポリ馴染なじみみなかりし都市としは今

悲痛ひつうと絶望ぜつぼう世界せかいに響ひびかす

中 島 早苗

木琴もことを優やさしくなでる音ねのごと

目覚めし春の蛙かえるの歌は

中 島 早苗

未練みれんなく「乙女おとめ椿つばき」はほとり落ち

空そらを仰あがぎぬ地に帰かえるまで

中 島 早苗

つばくろと呼ぶは家族かぞへと共に住すみ

成長せいちょう見みつむおほらかな過去かこ

中 島 早苗

菜なの花はなとタンポポ共ともに花はなざかり

黄色きいろは限りなき明るさもちて

林 恵美子

花蒲公英たんぽぽそらに太陽たいやうあるかぎり

日ひの出でにひらき入り日ひにしほむ

林 恵美子

最後のさいごと言いひしが今度ことばも最後さいごとふ

旅たびの予定よそぢはコロナコロナに消きゆる

林 恵美子

桜さくらの木き一本いっぴんなりても何処どこにても

花はな咲さくところ絵えになる景色けいしき

林 恵美子

産うぶ声こゑが聞こえてきそう野のの草木くさき

ひと雨あめごとにつぼみ色いろ付つく

翠 華

董とう摘とみ遅刻おそくの子等こどもらを叱なぐらぶに

和顔わげんで諭さとす教師かぎうの愛語あいご

翠 華

雪形ゆきかたをながめ鋏はさ研ひぐ爺おやと婆ばあ

軒場のきやうばに来きたる燕巢えんさう造つくり

翠 華

仮借かりかじなく砲火ぱうかが襲襲うウクライナ

廢墟はいきよにさ迷まよう児等こどもらに涙なみだす

石 坂 作次

ふる里さとの鎮守ちんしゆの杜とに響ひびきたる

太々神樂たいたいしんがくの消きえて春はるゆく

石 坂 作次

カラオケも自肅じしゆに堪たえてこの春秋しゆんしゆ

過すぎて再び春はる巡めぐりくる

石 坂 作次

轟轟ととどろとどろき流ながる利根川とねがわの

雪解ゆきとけの風かぜに髪かみの乱みだるる

石 坂 喜美江

雪解ゆきとけ増まし利根とねの川面がわはかがやきぬ

柳やなぎあをめる峡せきの眩くらしき

石 坂 喜美江

敵機てききより兄あにと逃にげたる隧道とがうは

戦時せんじをしのぶ懐なつかかしきところ

石 坂 喜美江

隧道とがうより離はなれ難がたきに瀬音せねきく

遠とほき日ひに見みし青あおき空そらあり

石 坂 喜美江

利根川とねがわの雪ゆきどけ水みづは水みづかさ

増まし柳やなぎはきばみもえぎ色いろ増ます

河 合 なみ江

ハンガーにドラエモンのシャツ干してあり

このシャツ誰が着るのかと云う

河合 なみ江

里まつり笛や太鼓にさそわれて

さみしくなりしコロナ禍の日び

河合 なみ江

四月馬鹿十八才で成人と

選挙がらみの法に改正

嶮 風

はらはらと母散りし時桜散る

三十五年目の今宵も散りぬ

嶮 風

植え替えて気分晴やか蝶も来て

紅白の梅乱れて咲きぬ

嶮 風

腰痛に眠れぬ夜はつづくとも

キーウの民の涙はてなし

嶮 風

第三回みなかみ町俳句短歌大会作品集

令和四年五月二十七日 発行

編集／発行 第三回みなかみ町俳句実行委員会

〒三七九―一三〇五

群馬県利根郡みなかみ町後閑三二一番地一

みなかみ町教育委員会生涯学習課

電話 ○二七八（二五）五〇二五